

全カリ英語の可能性

中田 達也

私は立教大学で「インテンシブ (I・II)」、「英語同時通訳法」、「海外文化研修」、「コンピュータを使った英語学習」、「英語教授の理論と実践」、「国際政治の英語」、「Politics and Economy」などの自由選択科目を履修した。どの授業も印象深いものだったが、現在の自分に最も影響を与えたと思うのは、やはり「インテンシブ」の授業だ。

私は中学・高校時代から英語が好きであったが、高校までの授業では構造や語彙を学ぶだけで、英語を使って実際に何かをする機会には恵まれなかった。しかし、英語をあくまで伝達手段の一つとして扱い、構造よりも伝達される意味に焦点を置く「インテンシブ」の授業を受けたことで、より実践的な英語力を身につけることが出来た。「インテンシブ」は確かにコミュニケーション力の養成を重視する授業だが、決して浅薄な日常会話やおしゃべりの域では終わらない。リサーチ・ペーパーの書き方やプレゼンテーションの仕方など、高度で洗練されたメッセージを伝達するための手段を学んだ。

英語が世の中のあらゆる領域に浸透している今、どんな学問領域、職業に進んでも、立教大学の「インテンシブ」で学んだ成果は役に立つことだろう。

私は大学三年から四年にかけて、アメリカのワシントン・アンド・リーという大学に協定留学をしたが、「インテンシブ」を履修していたお陰で、留学先大学の授業形態にはすぐ慣れることができた（それでも、リーディング・アサインメントの量の多さには圧倒されることが多かったが）。現在私は成蹊大学の国際交流事務室に勤務しており、業務で日常的に英語を使っている。海外とは電子メールでのやりとりがほとんどだが、その際にもインテンシブで学んだ英文ライティングの技術は大変役に立っている。

「インテンシブ」の授業に劣らぬほど、今の自分と大きなかわりがあると思われる授業は、「コンピュータを使った英語学習」の授業である。この授業では、立教の学生は英語で、アメリカの学生は日本語でホームページをそれぞれ作成し、お互いのホームページについてコメントをし合うというプ

プロジェクトを行った。しかし、アメリカの学生がそれ程このプロジェクトに熱心でなかったため、この試みは失敗に終わった。せっかく英語でホームページを作っても、誰も見てくれる人がいなかったため、残念に思った私は、「日本語でホームページを作れば、少なくとも自分の友人は誰かが見てくれるだろう」と考え、授業で習った知識を生かして、日本語でホームページを作り出した。私の個人的な関心から、TOEICやTOEFL等の英語の試験対策を載せるようにしたところ、現在では、そのホームページは1日に1,000人以上の方が見てくれるようなサイトになった (<http://how.to/eigo/>)。また、そのサイトがきっかけで、All About Japanというポータル・サイトで、英語学習に関するコンテンツの作成を担当するようになった (<http://allabout.co.jp/study/toeic/>)。社会人となった今でも、両方のサイトの運営は続けているが、ホームページがきっかけで英語関係の仕事が入ったり、人脈が広がることも多く、サイト運営は現在ではすっかり私の生活の大きな部分を占めるようになってしまった。「コンピュータを使った英語学習」の授業は、英語のスキル以上に、私に「ホームページ運営」というかけがえのない趣味を与えてくれたのである。

他にも、“Politics and Economy”では英語帝国主義について学び、英語を全く違った視点から捉えることが出来

るようになった。「英語同時通訳法」では、自分の時事問題に関する無知を反省すると同時に、英語と日本語という全く構造の異なる言語の際を行き来する通訳という営みの難しさと醍醐味を教えていただいた。「英語教授の理論と実践」という授業に触発された私は、立教大学とワシントン・アンド・リー大学のスペイン語の授業を、第二言語習得理論の知見をもとに比較・考察する卒業論文に挑戦した。

このように、私にとって立教の英語教育で学んだことは非常に多くあり、履修した授業の現在の自分との係わりは、それこそ千差万別といってもいいくらい違う。立教大学の英語カリキュラムが、表面的な英会話や、いわゆる教養英語のどちらにも偏らない、バラエティに富んだものであることの証左といえるだろう。現在私は国際交流事務室の職員として、大学の語学講座を企画・運営することもあるが、立教大学で私自身が受けたような英語の授業を再現したいという思いが、私の頭の片隅にあるということに時々気づくことがある。

なかた たつや

(本学文学部英米文学科2001年度卒業)